

# タイ仏教に学ぶ

善光寺徒弟 落合 隆

ひとつの印象的な映像がある。タイ国で長い間上映されたその映画は、ある青年の非恋物語で、それは彼の死によって完結する。その死は何を象徴しているのだろうか。

バンコックの富豪の息子に恋人を連れ去られた農村の青年は、その事件を契機として日ごろ父親から勧められていた得度を決意する。父親はその決意を喜び、三衣（チーオン）を大切そうに持ちながら村人たちに報告してまわる。車

座になって作業をする農婦の一人はその姿を見て小さく合掌をする。仏像でも比丘でもない。息子の得度を喜ぶ一介の農夫に向かって合掌するその姿からは、南方上座部仏教を小乗仏教と賤称する根拠を見いだすことはできない。

釈尊の大きな手で蒔かれた教えの種子は、伝播された国々の風土や固有の文化に育まれて、様々な花を咲かせた。花の形や色の諸相の成立は、それぞれの国土に育つように自在に変化さ



せる仏教の柔軟さによるものがあるが、種子はあくまでも同一のものに収斂される。それは息子の得度を喜ぶ父親への農婦の

合掌が、いくつかの媒体を通してもお、光の速度で釈尊に向かって行くことと同じ構造を示している。映画という庶民文化の一断面、それも時間的には数秒の場面にも釈尊の姿はたち顯われる。

仏教学を修めたわけでもなく、寺院の出身でもない、ごく普通の教育を受け、現代の日本社会で働き生活する私にとって仏教はおおむね無縁なものであった。加えて、私にとって寺院とは特別な儀式や法事以外には関わることのない

特別な場所であり、仏像は礼拝の対象ではなく、ほどほどの美意識を満足させる美術品であった。又、仏教のもつ様々な哲理は物事の認識方法を拡大させることもありうるといった程度の理解はあっても、日常生活における私の所作には仏教の影響はほとんどなかったと思われる。

そのような私にとって仏教との出会いはタイ仏教との出会いから始まったといえる。

タイの仏教は正しくは「テーラヴァアダー（南方上座部仏教）」と呼ばれるが、それは二百二十七条の戒律（男性の修行僧である比丘の場合）によって象徴されている。戒律の問題は仏教徒であることを強く自覚し始めた私自身の問題でもある。在家仏教徒としては五戒が定められている。そのうち、たとえば「殺生戒」とは何か。私の手の親指の付け根に一匹の蚊がとまる。簡単に叩き潰すことに躊躇する私はしばらくは見つめているほかに術がない。細い足を皮膚にく

い込ませて、その小さな生命は懸命に血を吸い続ける。この小さな生物の生と死がとるにたらない小さなものであるとする論拠は何処にもない。人間に限らずあらゆる生物が他の生物の死に依ってしか生を保ちえない運命を担っている以上、殺生を行なわないことが不可能なことは自明のことである。だからこそ「殺生戒」とは日常のあらゆる場面での生と死の検証作業を求める。「何故か」という問いへの解答は何処にも用意されていない。あらゆる日常的な行為に対する注意深い醒めた意識を戒律は求めているのではないか。戒律とはそのようにして、「お前は今、何をしているのか」という問いを間断なく発し続けるものである。

タイ僧伽の比丘は戒律の遵守を修行の柱としている。パーラーチック（パーラージカー）と称される四つの大罪、（一）性交の罪、（二）盗みの罪、（三）殺人の罪、（四）悟りについての

虚言の罪、から服装や食事の作法に至るまで戒律のすべてを守ることは、現代のタイ僧伽においても容易でないことは想像がつく。あの東欧諸国の激変をもたらした情報化社会は、固有不変とされる価値観をたやすく脅かした。情報は世界をかけめぐり第三世界と呼ばれるタイにおいても情報や物流の奔流から無縁であることはありえない。

水あれば 魚泳ぎ

田あれば 稲穂みのる

このタイ語であらわされた最古の刻文に見る牧歌的な生活感も、中間層（＝市民層）の形成とあいまって工業化を押し進める政府の方針や、現実に流通する工業製品の魅惑的な姿によって徐々に変わってゆくことであろう。それは価値基準の選択支を増やすということはあっても、あたりまえのことを理解する能力を高めることまでは保証しえないことを日本を含む先進

諸国がすでに明らかにしている。現代社会は激しく揺れ動き、未来の予測などとうていできない。

タイの民衆のブン（功德）志向や国家による保護によって成立するタイ仏教界も、世界の潮流や国内の諸条件の変化にともない変革を余儀なくされるであろう。少し視点を変えればタイ仏教に対する批判も成り立つ。仏教は少欲知足を説くところから、むしろ人を怠惰にするのではないか。生産活動に従事しない出家者がタイ国の全男子人口の一・五％―一・七％も存在すること事態が経済開発を遅らせているのではないか、貧しくても心が豊かなら良いとする見方は富めるものの傲慢で無責任な認識にすぎないのではないかと。

平衡感覚にすぐれているといわれ、仏教を生活のよりどころにする誇り高いタイ国民は過去の様々な仏教改革運動を展開してきた。古くは

一八三五年のモンクット親王によるタマユット運動。ブツダ・タート比丘によるチャイヤード場における新仏教運動。そして現在もなお様々な試みがなされている。タイ国民とタイ仏教界は、生命をかけて守りぬいた仏教国としての誇りをたやすく捨てる道は選ばないであろう。聖と俗の乖離。あるいは精神的価値と物質的価値の交換構造。そのことが互いをあざやかに照射し合う宗教的社会的力動性をかたく信じているように思われる。

さて、アジア的なるものを回避すると同時に、宗教に対する素朴な情熱さえも失いかけている日本を、彼らはどのように見ているのだろうか。たえまない技術革新により、驚異的な経済大国にのし上ったアジアの小国、日本。少なくとも極めつけの困窮者がほとんどいない状況は評価できるとしても、この国の精神的空洞は何によってもたらされたのか。不必要な情報と工業製

品を大量に溢れさせ、その中で溺れかけているようにも見えるわが国の現代社会にこそ、釈尊の教えが求められているのではないか。

ラック・タイ（タイの国体原理）として仏教を幼児期から教育されているタイとそうでないわが日本とでは、仏教に対する認識が異なっているのは当然である。しかし、明晰な合理性をもつ釈尊の教えは国情の差異を越え時代を越えてなお両国に生き続けている。在俗の仏教徒にすぎない私にすら、タイ社会において仏教がごく日常的なものではなく、それ以上のものがあるのではないかと、興味をもって感ずることが出来る。私は知らぬまに身につけてしまった余計なこだわりをすべて捨て、釈尊の教える法と、自分自身をよりどころにして、タイ僧伽に身を投じ、何ものかを学び、持ち帰りたいと切に願っている。

